

新たな保存書庫： 山中資料センター2号棟

白楽サテライト・ライブラリーの功績

せき 関 ひでゆき 秀行

(湘南藤沢メディアセンター事務長)

1 はじめに

慶應義塾大学メディアセンターの外部書庫として長年利用してきた白楽サテライト・ライブラリーの資料は、代替施設として2015年9月に竣工した山中資料センター2号棟に移転され、2016年3月をもって白楽サテライト・ライブラリーは閉鎖されその役目を終えた。本稿では閉鎖に至った経緯を記すとともに、白楽サテライト・ライブラリーが果たした役割と功績について振り返りたい。

2 白楽サテライト・ライブラリー閉鎖の経緯

白楽サテライト・ライブラリー（以下、白楽SL）はSBSロジコム株式会社（以下、SBS社）との賃借契約の下で、倉庫スペース2フロアに手動式の集密書架を設置した、慶應義塾大学の来館利用可能な外部書庫として1999年3月に開設された。やがて白楽SLは、本が溢れ書庫スペースの不足が経常化していたメディアセンターにとって、円滑な資料の管理・提供を確保する上で、欠くことのできない施設となった。その白楽SLを今回手放す結果につながった、（白楽SLが入っている建物の）土地の再開発の話が持ち上がったのが2013年8月であった。

この土地を平面図として見た場合、白楽SLが占める面積は約4分の1程度で、他の部分は別のテナントが使用しているほか、SBS社の運送事業のために使われていた（白楽SLの建物の1階にSBS社の六角橋営業所があった）。東急東横線白楽駅から徒歩約20分、横浜市営地下鉄岸根公園駅からは徒歩約7分というアクセス至便の場所にあり、土地のより有

効な活用のために再開発を行いたいというのがSBS社からの申し入れであった。それは白楽SLをこれまで通りの契約内容で運営し続けることができないことを意味していたが、再開発を行うという大方針のみで具体的な開発内容は定まっておらず、白楽SLの存続も含めて慶應義塾がテナントとして残る可能性を踏まえた検討の申し入れでもあった。この時点で、メディアセンターにとって白楽SL以上に利便性の高い外部書庫は考えられず、メディアセンターの事情だけを考えれば白楽SLの存続が望まれた。



図1 白楽SLの建物

再開発の計画を考える中で慶應義塾がテナントとして残るために示された条件は、賃借の規模の拡大である。現在の書庫の規模を1.5倍ないしは2倍に増やし、さらに新たに慶應義塾の施設（たとえば学生寮等）を加えた場合の「慶應義塾テナント像」が議論の対象となった。テナント規模の拡大は、必然、その規模に比例した賃借料の増大につながる。したがって、書庫スペースの問題に限って見た場合、

慶應義塾側の選択肢は、テナント規模拡大に伴うコスト増を受け入れて白楽SLを継続するか、白楽SL以外の外部書庫を新たに確保するか、の二つであった。

白楽SL存続の道を模索する中で、規模拡大に伴うコスト増への対策として、白楽SLの書庫スペースを他大学と共有できないかという発想が出てきた。仮に、白楽SLの書庫を2倍に拡大できた場合、これまでの白楽SL一個分の書庫スペース（約50万冊分）の新たな活用の可能性が出てくる。また、程度の差はあっても書庫問題にはどの大学も苦慮しているはずである。この認識から、他大学に新たな書庫スペースの一部を貸し出しその収入によって慶應義塾のコスト負担減を図るというアイデアの実現可能性を探るため、白楽SLと比較的近距離にある大学に相談してみることにした。当時何とか白楽SLを残せないか藁にもすがる思いであったが、SBS社も新たな書庫ビジネスの可能性として関心を示してくださり、実際にメディアセンター職員2名とSBS社の担当者1名とで2013年10月初旬に神奈川県内の3つの大学図書館を訪ね、白楽SLの現況を説明し今後の書庫共有の可能性について懇談する機会を持った。書庫問題の深刻さは大学によって違いがあったが、書庫の共有というアイデアに興味を示してくれる大学もあった。しかしながら図書館担当者の一存で具体的な話が進められるものでもなく、白楽SLの今後の計画が固まったところであらためて正式な提案をさせていただくための地慣らしにとどまったというのが当時の感触である。

その後の慶應義塾内での検討では再開発の中で書庫以外に設置可能な学内施設は見出せなかったが、SBS社との間では、現在の書庫スペースを2倍に拡大することで白楽SLが再開発後のテナントとして残るといった内容での提案がまとまった。外部書庫として利便性の高い白楽SLを維持でき、また書庫スペースが倍加することで書庫不足の緩和にもつながるこの案は、メディアセンターにとって歓迎すべきものであった。一方で、規模の倍加に応じて増額となる年間賃借料を払い続けることができるのかというのが最大の問題である。特に、書庫不足の問題を抱えたまま紙媒体の資料を保管し続ける限り、この

賃借料は将来に渡って払い続けることになる。

白楽SLの資料のための書庫は何としても確保する必要があったため、白楽SLを残す案の検討と並行して、別の外部書庫の獲得の可能性を追求した。利便性の観点から、メディアセンターの外部書庫として最も望まれるのは、慶應のキャンパス内での書庫建設である。今回の白楽再開発の話を機に、三田をはじめとする各キャンパス内もしくは隣接の土地に白楽SLと同等以上の規模の書庫建設が考えられないか、大学当局、管財部と候補地となり得る場所を検討したが、その規模の書庫建設が可能な場所はどこにも見出すことができなかった。

最終的に、慶應義塾としての意思決定に向けては、1994年から運用してきているもう一つの外部書庫である山中資料センターに100万冊規模の書庫を新たに建設し、そこに白楽SLの資料を移転しつつ新たな書庫スペースとして運用していくという提案を、白楽SLの拡大案の提案と併せて行った。二者択一となったが、結論として山中資料センターに2号棟を建設する案が採択された。短期的には安く上がるにしても半永久的に賃借料を払い続けることになる白楽SLの拡大案よりは、一時的にはコストが嵩んでも慶應義塾の土地に建設することになる山中資料センター2号棟の方が長期的にはコスト安になるという判断がそこにはあった。

2013年10月に白楽SLの閉鎖および山中資料センター2号棟の建設が正式に承認され、2016年3月の白楽完全退去を目標に一連の移転計画が進められることとなった。

3 白楽サテライト・ライブラリーを振り返る

(a) 開設当時の状況

白楽SLは、書庫狭隘化問題への対策として、1994年開設の山中資料センター（1号棟）に続いて、1999年3月に開設された。東京通運株式会社横浜支店（当時）のビルの3階と4階の倉庫を賃借し、そこに冊数計算にして50万冊規模の手動式の集密書架（日本ファイリング社製）を設置し書庫とした。

電車の最寄り駅から徒歩圏内という立地にあり、来館利用を想定した図書館という位置づけで運用された。3階に閲覧席を10席程度置き、同じ3階の事務

特集2 新たな保存書庫：山中資料センター2号棟

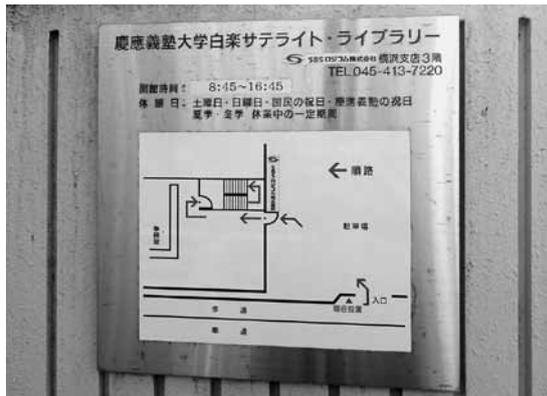


図2 建物入口の看板

室に常駐スタッフを配置し、事務室で貸出・返却にも応じられるようにした。開設当初は、平日8時45分から18時まで、土曜日は16時まで開館した。スタッフは専任職員1名と業務委託2名（フルタイム）が常駐した。

最寄り駅からの徒歩圏内とは言え実際に来館する利用者の数は多くはない。中心となるサービスは、利用者のリクエストによる各キャンパスへの資料の取寄せへの対応である。慶應では「塾内ILL」と称する、利用者が希望するメディアセンターの資料を希望するキャンパスで受け取れるサービスを提供している。白楽サテライト・ライブラリーの資料もこの塾内ILLの対象である（たとえば、三田キャンパスの学生が白楽サテライト・ライブラリーの資料を信濃町メディアセンターで受取り、貸出手続きすることができる。さらに、それをどこのキャンパスでも返却することができる）。このサービスを支えるのが「塾内便」である。塾内便は、慶應の東京・神奈川地区の各キャンパス・支部を毎日配送車が巡回するもので、主には慶應内の部署間、構成員間での文書のやりとりのためのシステムであるが、メディアセンター間の資料の配送にもこの塾内便を利用している。そして白楽SLもこの塾内便のルートに入っていた。利用者から見た場合、自身が利用したいと思う資料が手元になく白楽SLに行ってしまうという不便はあっても、リクエストをすれば翌ないしは翌々営業日には資料が届くことが保証されていた。このため、塾内便の巡回の時刻に合わせて、それまでにリクエストがあった資料を書架から取り出し発送することが白楽SLのサービスの

柱であった。このほか、雑誌資料の文献複写、来館した利用者との対応、日常の書庫管理、各メディアセンターから資料が移転してきた際の対応など、規模は小さいにしても、業務内容としては通常の図書館と同様のものがあつた。特に他のメディアセンターと異なるのは、保存書庫として常に書架の空き容量を把握しておく必要があつたため、棚レベルで書架がどれくらい使用されているかを「書架状況表」というエクセル文書で維持しておくことが重要な仕事であつた。

(b) 白楽SLの資料

山中資料センター（1号棟）の資料の大部分を信濃町メディアセンターと理工学メディアセンターの自然科学系の雑誌が占めたのに対して、白楽SLには三田、日吉、湘南藤沢の各メディアセンターの単行書が主たる資料として配置された。したがって、山中資料センターでは文献複写を中心に、白楽SLも一部雑誌があり文献複写を行っていたものの、前述の通り各キャンパスへの現物取寄せを中心としたサービスが行われた。

1998年の開設時には三田メディアセンターの蔵書が移転され、その後、日吉、湘南藤沢の蔵書が加わつた。閉鎖直前の2015年9月末時点での白楽SLの蔵書冊数は450,108冊に上る。



図3 館内（3階フロア）の状況

(c) 安定期の運用

白楽SLは、前述の通り当初は専任職員を置き、また平日は18時まで、土曜日も16時まで開館していたが、安定運用が継続される中で、最終的には開館時間を平日16時45分まで、土曜日は休館とし、専任職員を置かない常駐の委託スタッフ2名のみの体制

に移行していった。土曜日は元々塾内便の巡回がなく、この事による塾内ILLへの支障はなかった。

4 利用統計から見た実績

白楽SLの17年半に渡る運営の実績として、塾内ILLと来館者の年間件数の推移を表1、表2に示す。

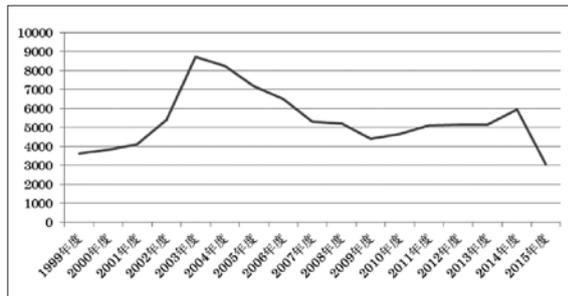


表1 塾内ILL件数の推移

塾内ILL, すなわち各メディアセンターへの取寄せ件数は、2003年度の8,735件が最も多い件数であったが、過去10年間ほどは概ね年間5,000件前後の取り寄せ件数で推移した。2014年度に件数が伸びているのは白楽の閉鎖の予告があったためあらかじめ必要な図書を借り出すケースが増えたためと思われる。また、2015年度の件数が少ないのは、利用が終了した9月までの半年間の件数のためである。

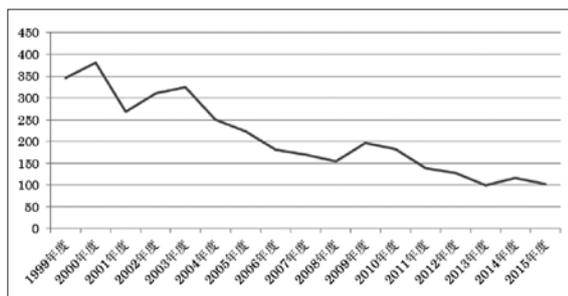


表2 来館者数の推移

来館者数は開設直後の2000年度をピークに漸減していった。これは白楽からの取寄せが定着してきたことと、年数が経ったことで配置資料の利用頻度自体が下がってきたことなどが背景にあると思われる。しかしながら、特定の一冊ではなく資料群としての閲覧のための来館利用のニーズは常にあった。冬期に暖房設備なしの閲覧席で利用していただくを得なかったなど環境的には十分とは言えない場所ではあったが、白楽の近隣に住むリピーターの方

もおり、常駐スタッフを配置して来館利用に応じる体制を維持したことは白楽SLにとって必要なことであったと評価できる。

5 白楽サテライト・ライブラリーの功績

白楽SLは、当時最も深刻であった三田メディアセンターの書庫狭隘化対策のための外部書庫として開設された。紙の資料をいつでも見たい時に見られるように自身のキャンパスの図書館に置いておきたいという研究者の気持ちは十分理解できる。白楽SLへの資料移転に際して、教員から強い反対や抵抗があったと聞いている。そのような経緯を経て開設され、17年間にも渡り、外部書庫として運営されてきた白楽SLであるが、外部書庫としては半ば理想的な運営・サービスができていたのではないかと思う。

すべてに通じるのはその立地条件である。横浜市神奈川区六角橋という主要な鉄道路線からアクセスしやすい場所にあり、いざとなれば半日仕事で行き来ができる。利用者が来館利用できることが最大のメリットであるが、図書館運営の観点では業務委託していたため、メディアセンター本部の担当職員が定期的に訪ねて状況確認する必要があり、その点でも立地のアドバンテージを生かすことができた。そして何よりも前述の塾内便のルートになっていることで、1件1件の配送コストを気にせずに迅速な資料取寄せが確立できていたことで、利用者は白楽SLを保存書庫という特殊な位置づけであることを意識せず、他のメディアセンターと同様に利用できた。

最初は5年間の賃借契約を結び、それ以後は1年毎の契約更新を行い運営してきた施設であり、将来に渡る永続的な契約更新が保証されていなかったことは考えればそうなのだが、土地の再開発の話が浮上するまで、白楽SLがなくなることなどスタッフの念頭になかったのが実際であろう。それだけメディアセンター全体の図書館運営に深く浸透し、我々にとっては「あって当たり前」の図書館になっていた。白楽SLの立ち上げに尽力した当時の職員である宮崎貞治氏は、本誌の記事の中で、白楽SLは「名実ともに6番目のメディアセンターになれる

ことを目指して」と白楽SLの将来に向けた目標を掲げている。その後薬学メディアセンターが増え文字通りの6番目ではなくなったが、白楽SLはメディアセンターになる、というその目標は達成できたと振り返ることに異論を唱える者はなからう。

6 おわりに

メディアセンタースタッフに惜しまれつつ、その役目を終えた白楽SLであるが、その機能は資料とともに山中資料センター2号棟に移管された。立地条件という点では大きく異なるものの、白楽SLで培われたノウハウは山中資料センターにも受け継がれている。2016年4月以降の2号棟の本格運用開始後も、資料取寄せについては白楽SL時代と比べても遜色ないサービスを提供できている。今後も白楽SLでの利用者サービスを外部書庫でのサービスの理想の一つとして記憶しつつ、山中資料センターのより円滑な運営を目指していきたい。

末筆ながら、これまで白楽サテライト・ライブラリーの運営に携わってきていただいた方々に御礼申し上げます。特に、立ち上げから閉鎖に至る長年に渡って委託業務を担ってくださった株式会社湘南コミュニティの皆様、慶應の専任職員が常駐しない中その委託スタッフをいつも暖かく支援してくださったSBSロジコム株式会社六角橋営業所の歴代の皆様、そして、今回の白楽再開発の話から山中資料センター2号棟の建設が決定するまでの間、学内コンセンサスの形成に向けて協同していただいた当時の慶應義塾管財部長酒井秀明氏に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 宮崎貞治. 白楽サテライト・ライブラリー. MediaNet. 1999, no. 7, p.30-34.
- 2) 宮木さえみ. 白楽サテライト・ライブラリーの現状と今後. MediaNet. 2000, no. 8, p.59-61.